



138号

2008/11 /1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



水滸伝「林冲發配・野猪林の場」より魯智深(殷秋瑞)と林冲(張紹成)―‘わんりい’の京劇鑑賞会にて by 井田 & 木村

‘わんりい’138号の主な目次

北京雑感その(29)「改装工事」	2
私の調べた四字熟語(27)「一網打尽」	3
松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より	3
すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮7	4
鉄道で行く大興安嶺森林の旅(1)	6
媛媛講故事(8)「龍の九匹の息子たち」	8
四姑娘山・写真便り(13)「This is Africa」	9
スリランカ紹介(23)「シーギリヤのみやげ物売り」後編	10
アフリカとの出会い(28)「ありがとう」	11
私の四川省一人旅(19)垂丁VI・二度目の垂丁	12
中国山西省のワンダーランド・綿山	14
綿山を楽しむ	15
中国を読む(56)「辺境で診る辺境から見る」	16
「常回家看看」の歌詞	16
京劇わくわく講座・案内	17
‘わんりい’掲示板	18

まちだ市民大学HATS・まちだ市民国際学
公開講座「中国の伝統芸能・京劇を知る」

2008年11月18日(火) 18:30～20:30
於：町田市民フォーラム・3Fホール
講師：張紹成(CSC企画 京劇団主宰)

●参加：無料 申込みは、11月4日以降コールセンター
で先着順で受け付けます。☎：042-724-5656

*対象：町田市内在住、在勤、在学者 定員80名
※上の講座に続けて‘わんりい’主催の京劇関連講座を
12月12日(金)を開催します。(17ページ掲載)

♪「中国語で歌おう!会」・11月の歌♪

「常回家看看」(両親に贈る幸せな時間は? 歌詞:16p)

於：まちだ中央公民館 7F・第二音楽室
JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、
小田急線南口徒歩5分 町田東急裏 109 ファッションビル 7F

11月28日(金) 19:00～20:30

指導：趙鳳英 (中国人歌手)

ご参加の方は録音機をお持ち下さい

昨年、北京オリンピックは、一応無事に終わりました。開会式の演出に関しては、親中国、反中国、それぞれの立場から様々な感想が語られましたが、競技自体は問題なく執り行われました。我々としてはあれこれ言いたくなるような事柄も、中国の人々にとっては、世界的な映画監督、張芸謀氏が演出した壮大で華麗なスペクタクルショーという位置づけで、誇り高い中国人を十分に満足させるものだったようです。

オリンピックスタジアム「鳥の巣」や水泳競技場「水立法」の周りの写真を見せていただきましたが、昨年10月には、建造物は未完成で、地面は掘り返され、鉄板をめぐる中にクレーン車が見えるだけだったのに、今はもう、「ずっと昔からこんな風景だった」という雰囲気です。

マラソンの実況中継で、前門付近がどう変わったか見たいと思いましたが、テレビでは見られませんでした。然しながら、昨年、私が帰国する前の前門は、建物をすっかり取り壊し、地面を掘り返して、新しい造成地のようでした。あの様子から想像して、前門には全く新しい町並みが出来上がっていることでしょう。オリンピック競技場のように、目を見張るような変化を遂げて……。

新しくなった北京は、広々とした敷地を石畳やレンガで覆い、芝生を植えて、清潔な町並みが連なるようになりました。以前は、ちょっと裏道に入ると舗装されていないので、雨でぬかるみ、風で砂埃を巻き上げていたのですが、今では、春先の黄砂に北京市街地の砂埃が加わることはなくなったようです。

一昔前の北京は、一年中、砂埃がとても酷かったと思います。ちょっと風の強い日には、室内に砂埃が入ってきて、掃除が大変でした。これは、未舗装の道路や空地のせいばかりでなく、窓の密封性も悪かったためだと考えられます。私は、この北京の砂埃に関連して、ちょっと面白い経験をしました。

そもそも私の北京生活は、中国人である友人のお父様がお亡くなりになって、お母様が独り暮らしになったので、暫く一緒に住んで欲しいといわれたことから始まりました。葬儀の後暫くして、日本で生活している子供たちのところで過ごしたお母様は、滞在期間が切れるし、やはり北京で暮らしたいからと北京へ帰ることにしました。独り暮らしになるお母様を心配して、子供である友人が、「暫く母と一緒に住んで、北京の生活を楽しまませんか」と誘ってくださったので、好奇心が旺盛で身軽な有為楠は、二つ返事で引き受けました。

2000年の4月にそのお母様と一緒に北京へ出かけました。彼女の家は8ヶ月程空家になっていたもので、家に着くとすぐに掃除をしなければなりません。家の中は、床やテーブル、棚などにうっすらと土埃が溜まっているのです。ちょっと古いけれど、しっかりした鉄筋の集合住宅で、窓ガラスは二重になっているし、一見したところ、どこもきちんと閉まっているのですが、溜まった埃の量はかなりなものでした。

日本では、10年留守にしても室内にこんなに土埃が溜まるとは考えられません。床がたたきの工場が5.6年使わなかったら、この位埃が溜まるだろうかと言う程の量でした。時期的に、黄砂が吹き荒れた後だったせいかもしれませんが、埃の量には、本当にびっくりしました。しかし、北京の人たちにとっては、特別驚く量ではなかったのです。

暫くして、お母様は家中の窓枠を交換しました。古いものは、鉄枠で観音開きの窓でしたが、新しいのは、白い強化プラスチック枠の引き戸にしました。ガラスは、古い窓もそうでしたが、ガラスを二枚嵌めた寒冷地仕様です。古い窓枠はくすんだ色だったので、この白い窓枠は非常に目立ちますが、気をつけてみると、同じような窓枠を取付けた家が多いことに気がつきました。窓枠の交換はちょっとしたブームのようで、一棟30戸の建物で、平均10戸以上がこの白い窓枠に替えていました。これで気密性はかなり良くなって、砂埃はかなり少なくなりました。

次にお母様がしたことは、木地板、つまり板敷きの床にすることでした。改造前はコンクリートのままで、居間だけにリノリウムタイルを貼っていましたが、今度は、寝室と居間を板敷きに、食堂と台所にはタイルを貼りました。コンクリートの床に板を直接並べて貼っていくので、目が点になる思いで工事を眺めていました。それでも、工事が完成してみると、見違えるように快適な部屋が出来上がりました。

この床の張替え工事でも流行のようで、階段の両側にある10戸の中で、続々と工事が続き、その時の、2年足らずの滞在の間に、8戸が工事を済ませました。床の張り替えは大きな音がするのですが、朝7時頃から始まることがあります。大きな音はお互い様というのでしょうか、どこからも苦情は出ないようでしたが、9時頃から常識の人間には、文句を言いたくなるような時間でした。もう8年も前のことですが、北京の建設ラッシュのミニチュアを見るようでした。

最近は振り込め詐欺の被害が大変増えているようです。もし、この犯人グループが一斉検挙されたとしたら、「振り込め詐欺の一味、一網打尽に捕まる」などと、新聞に載ることでしょう。悪者のグループを根こそぎ捕まえた時に良く使われる「一網打尽」は大変身近な四字熟語と言えると思います。

さて辞書ではどのように書かれているのでしょうか、調べてみましょう。

三省堂 現代国語辞典では、「一網打尽 網を打って一度に魚をみなとらえる意味から、一度に多くの悪人をとらえること」

小学館 中日辞典では、「^{yiwǎngdǎjìn}一網打尽：

一網打尽(にする)」

と載っていました。日中ともに意味は完全に一致しています。

この成語の由来は、宋朝魏泰「東軒筆録・卷四」^{ぎたい}注)の中の次の部分です。

刘元瑜见宰相曰 “聊为相公一网打尽”(刘元瑜が宰相に会って言いました。“ひとまずは、宰相閣下の為に(一味を)残らず捕まえました”)

北宋の時代、有名な詩人の蘇瞬欽^{そしゆんきん}は大きな志を持っていて、范仲淹^{はんちゆうえん}の後任として、奏院の主官に推挙され、しかも范仲淹の改革派に加わりました。彼は度々仁宗皇帝に書状を書いて、政治の得失について説き、当時の宰相の呂夷簡^{りゆういけん}を批判しました。呂夷簡はこれに不満を抱き、いつか蘇瞬欽を陥れてやろうと機会をうかがっていました。

毎年、秋の感謝祭では、各部の役人は物品をお金に替えて、皆に心ゆくまでお酒を飲んでもらう慣わしになっていました。

或る年、蘇瞬欽は奏院の中の不要になった公文書類を売り、自分の懐からも少し加えて宴を催し皆を招待しました。更に皆にもっと楽しんで貰おうと、流しの女演歌師なども呼んで相伴をさせました。太子に仕える李定という役人も宴に参加したいと思いましたが、断られてしまいました。

それを根に持った李定は、蘇瞬欽とその一味が無駄遣いをして歡樂に耽っているという噂を城中に流しました。仁宗皇帝の側近である劉元瑜^{りゆうげん}がこの噂を聞いて直ちに皇帝に言上したところ、宰相の呂夷簡もその機に乗じて、蘇瞬欽の悪口を並べ立てました。

仁宗皇帝はこれを聞いて大いに怒り、蘇瞬欽が古い公文書類を売ったことを、横領罪とみなして彼を首にしました。また、宴会に参加した改革派の者たちも、ことごとく罰せられたので、改革派は大変な打撃を受けたのです。

劉元瑜は呂夷簡に「今回あなたのために蘇瞬欽一味どもを一人も漏らさずに“一網打尽”にしました」と伝えました。

〈注記〉

東軒筆録：宋朝の魏泰の撰による雑録集で、唐代太祖から神宗に至る要人達のエピソードを集めたもの、全十五巻。

松本杏花さんの俳句

yú qíng cán xīn

「余情残心」より

灯下なる白菊の芯うすみどり

níngshén kàn dēng xià

凝神看灯下

gūo xiāng lěng bái júhuā

孤傲香冷白菊花

dàn dàn lǜ ruǐ yǎ

淡淡绿蕊雅

季语：菊花，秋

赏析：凝神看赏灯下的白菊，以修神养性。静观某一物体，宛如坐禅一般，能驱除凡俗杂念，达到人与物的对话。

平时总觉得白菊花通体洁白，这时才发现花蕊是谈绿色的，颇有感触。其实，花木都含有叶绿素，在娇嫩晶透红。

这谈绿色的花蕊，着实令人感到以傲寒闻名的菊花更加清雅。

野分晴柿の実ひとつ落ちにけり

qiū lǎng jìn fēng guā

秋朗劲风刮

jīnhuáng shìzǐ zhītóu guà

金黄柿子枝头挂

yī zhī zhèng luòxià

一只正落下

季语同前 “秋风肆虐狂” 一首

赏析：深秋，金橙橙的柿子挂满树枝，劲风狂吹，一只柿子坠落下来。“一叶落而知天下秋”，如今的劲风连柿子都能吹落下来，离寒冬还会远吗？耐人寻味的是，作者强调只有一只柿子落下，而不是多只，可见触动作者的是柿子落下的瞬间，而不是风吹的过程。

すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮

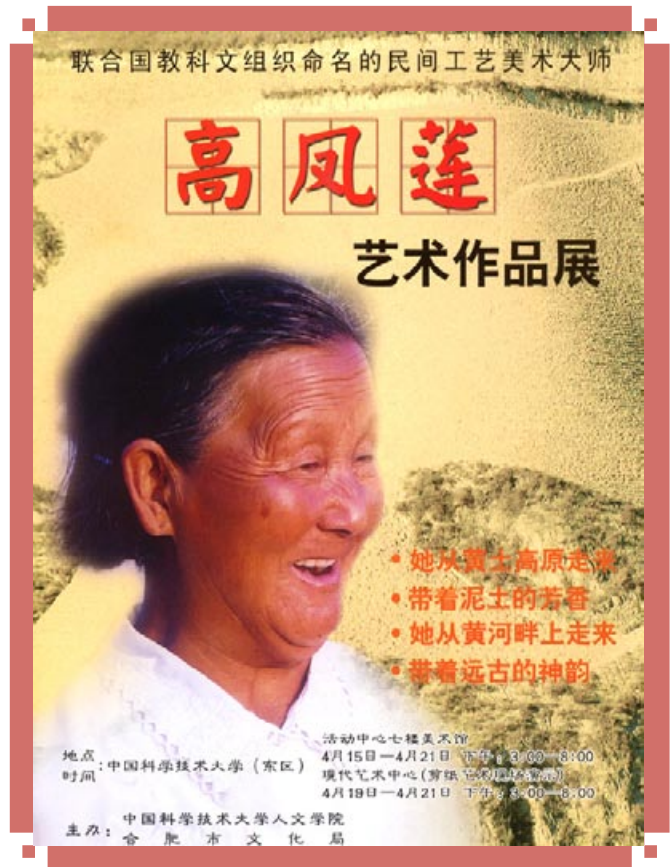
周路 著 岩田温子 訳
第7回 約束を果たして(最終回)

延川を離れて以来、高鳳蓮さんの剪纸の展覧会開催のことはずっと私の心に掛けていました。高鳳蓮さんの展覧会は北京で行われたことはありますが、それは他の人たちとの合同展覧会で、高鳳蓮さん単独での展覧会が開催されたことはありませんでした。

国外での開催は手続きの面倒さや経費の問題などがあり簡単ではありませんが、中国国内でなら機会はあるでしょう。この十数年間、私は延川の友人たちの剪纸展、布堆画展、写真展、書画展を何回も開催しました。しかし、これらの展覧会にかかる経費は出展者が自費で負担し、作品が売れたかどうかは私は関与しませんでした。これらの点でとても気楽でした。

2004年3月、とうとう高鳳蓮さんの展覧会開催の機会がやってきました。長年の友人達である中国科学技术大学人文学部の数人の教授たちと話し合った結果、中華民族文化とその精神を知り高揚させることに視点を置いた教育の一環として、中国科学技术大学という、中国で最も囁目される理工系大学が陝北民間剪纸展を開くことを決定しました。

実は、当初の計画では比較的年齢が若く、この年の初めに合肥で展覧会を開催し、好評を得た延川の別の剪纸芸人を招く予定でした。ところが、高鳳蓮さんが4月に北京へ行き、学術研究会に参加した後、帰郷の途中に合



高鳳蓮さんの展覧会のポスター

肥に立ち寄りという知らせをもらいました。私は強力に高鳳蓮さんを推薦し、教授たちも私の意見を受け入れ、高鳳蓮さんの展覧会と特別講演を中国科学技术大学で開催することになりました。



作品の前で嬉しそうな高鳳蓮さん。於：中国科学技术大学の展覧会場

大学は高鳳蓮さんの、70歳という年齢に配慮し、彼女の娘と孫が同行すること、全行程の旅費と宿泊費はすべて大学側の負担とすること、作品の売り上げは全て彼女のもとに入れることに同意しました。

2004年4月12日の朝、高鳳蓮さんの一行三人は北京での「非物質文化遺産研究会」出席後、合肥へまっすぐやってきました。

4月15日に始まった展覧会では、大学構内の立派な広い会場一杯に高鳳蓮さんの剪纸や布堆画(次ページ掲載)の作品が展示され、会期中は学生たちをはじめ、



来場した子どもたちの真剣なまなざし

一般の来場者がひきもきらず訪れ、自由な発想で大胆に剪られた作品を前に賞賛を惜しみませんでした。また、会場で実施された高鳳蓮さん達による剪紙実演では、毎回多数の人が彼女達の周りを取り囲み真剣なまなざしで剪紙を剪り出す手元を見ていました。

展覧会は4月23日無事に終了し、高鳳蓮さんも大学も展覧会の成功を喜び、私も高鳳蓮さんとの約束を果たすことができました。中国科学技術大学は、大学創立以来、初めての高水準な民間剪紙芸術展開催の結果、教師と学生たちの視野を大きく広げることもでき、大学が意図した目的を十二分に果たしたといえます。

【高鳳蓮さんの布堆画作品】

高鳳蓮さんは剪紙の著名人ですが、布堆画と呼ばれるアップリケの制作にも意欲を燃やしています。

布堆画は陝西省延川一帯では昔から盛んにおこなわれているのですが、もともとは女性たちの普通の暮らしの中の針仕事でした。

子供たちが遊び、男たちが畑仕事をすれば衣服の肩や膝の部分はすぐに薄くなり、破れます。頭がよくて手先が器用な女の人たちはすぐにその部分に当て布をして繕うのですが、その部分を自然の花の模様にならざるを得なくなり、その習慣から、新しい衣服（特に子供の衣服）にも花の模様、獅子や虎の模様が縫い付けられるようになりました。

模様を縫い付けた衣服は彩りも豊かで楽しい印象を人々に与え好まれました。そしていつか、布堆画は衣服から独立して壁に掛けて鑑賞をする民間の芸術品として見られるようになりました。

高鳳蓮さんの布堆画は衣服とは関わりなく、剪紙で表現し

きれいなものを表現できる美術形式として制作されています。布堆画に盛り込まれた内容は剪紙同様のもので、図柄も剪紙作品のコピーのようです。ただ、多色の布を貼り合わせ、重ね合わせることで画面に様々な色彩が加わり、作品を一層印象的にしています。

作品の主題は、君主や門神などですが、それに加えて、民間伝説や実生活の描写を補足的に取り入れています。また布堆画の余り布でチョッキ、ショルダーバッグ、財布などを商品として制作したりしています。



山 神



門 神

東北地方第一の大都市であるハルビンは冬になるとマイナス40度の世界となって冰雪芸術が有名である。しかし夏のこの時期は快適な避暑地として人気があるという。ところが今年は暑さが厳しい。

私は家を出る時に「十日間ばかり避暑に行ってきます」と言って出掛けたが、日本と変わらず夏の陽射しがギラギラしていた。街の中央通りは、ロシアの面影の残る美しい建築群が並び気分もゆったりと、アイスクリームを食べながら雑踏の中をキョロキョロと歩いた。この通りの突き当りは松花江である。北には松花江の水防記念塔が高く聳えて洪水時の水位が記録されていた。夕方の河辺は思い思いの人達が夕涼みをしたり、食事をしたりしている。

溢れるほどの物売りの声と物の匂いを呑み込んで滔々と流れる大河が目の前にあった。又忘れられないのはビザンチン風格の素晴らしい「サンソフィア教会」である。帝政ロシア当時のもので1907年に建てられ、現在は建築芸術博物館として開放されている。この日は休日であった為に大変混雑しており、花婿花嫁に出会ったのも幸運であった。

その晩、夜行列車に乗る為にハルビン駅へ。待合室はごった返した人達で甲高い声の放送も聞きとれないほど。

駅のホームには「伊藤博文」が狙撃された位置と狙撃犯

の立っていた位置がタイルの模様で示されていたが、五メートル位の近距離には思わず驚いてしまった。

コンパートメントの上段に横になり眠る。

寝苦しき車輪の音や明けやすし
月の友大興安嶺超ゆる夏
突走る大草原の夏暁かな

翌朝到着したのは内モンゴル自治区の「加格達奇」であった。洒落た駅舎の上には月が残る。休憩の後バスにて少数民族のオロチョン部落を訪ねた。独特の文化を持ち、鹿類の狩猟やトナカイの飼育、漁労採集等が生活の糧になっているらしい。広大な原生林のあちこちに池塘があって動植物の宝庫である。正にエコロジカルな生活をしている。バザールには向日葵や南瓜の種、肉桂の木片又肉塊や魚類が夏の日差しに晒されて売られているし、売り子と言えば昼寝をしたり、井で何やら食べている。実にのんびりした生活だ。

加格達奇の街に戻ると何と不釣り合いなと思う様な立派な博物館が建っていて、中は寒くなる程の冷房が入り(客は私達一行十名だけ)最新の機器を駆使してこの地方の環境を説明してくれた。又街を見下ろす小高い丘の上には、この地域の厳しい気象条件下で鉄道を敷設した工夫の犠牲者が祀られており、中国独特の大きな像に碑も建てられ、真赤な夕日を浴びていた。もう二度とこんな遠くまで来ることはないだろう、と思いつつ郷愁にかられた。

翌日はいよいよ大興安嶺をぬけてハイラルに入る。早朝に列車に乗り込んだが、さすが日本人は全くいない。土地の人達は大きな荷物を持った私達をジロジロと珍らしそうに見ている。大森林地帯を走り、大草原を走り、漸く夕方になってハイラルの駅に到着したのである。夕焼け空に映えた駅舎は日本軍、ロシア軍の建てたものと現代の中国の駅と並んで次第に夕闇に消えていった。「ハイラル」私は単に観光のつもりであったが……。

ところが翌朝ホテルを出発したバスが最初に寄ったのは神社の手水舎の残るある場所であった。到着すると、同行の一人がお線香と、お酒と少しばかりのお菓子を供えて拝んだのである。私達も同じく手を合わせ、ロシアとの激戦で多くの命を落した人達の冥福を祈った。

ここには当時、明治神宮のような立派な拝殿と鳥居があって、兵隊達の安らぎの場であつたらしい。コンクリート造りの手水舎はそのまま残っていたが拝殿のあった場所は現在、役所が建てられていた。又日本人小学校はそのままある。二階建ての木造の校舎は中国人の「文化街小学」として使用されており、夏休みの為に児童の姿は見かけられなかったが廊下や壁は磨き上げられて大切



に使用されている様子が窺われた。

午後からはホロンバイルへ。途中ハイラルの街の外れ、ここから大草原のはじまる地点にある「平和の森」へ寄った。広々とした草原のあちこちにはのんびりと草を食む放牧の牛が見える。私達は一直線に続く道路からバスを降りて300米位中に入った場所まで歩くと、森とは名ばかりの植林された松が身の丈ほどに育った林に着いた。放牧の牛や羊に荒らされないように柵が三重にできて、保護されている。こんもりと土の盛り上がった塚があり、その前に「中日友好和平之林」と刻んだ碑が建っていた。その背面には

「戦争の悲惨な傷跡を今なおとどめてこの地に眠る中国人の御霊の安らかなことを祈念し、中日両国間の永遠の友好と地球の緑濃い未来を願望し、両国国民が手を取り合って汗を流しここに平和の象徴の森を造りました」

と日本語、中国語の両方で刻まれている。ここは今回の旅で私が最も忘れられない場所である。

円き塚殊更愛し蚊の唸り
風死すや負の遺産なる地下塹壕

「包」に泊まった翌日、ハイラルに戻り地下塹壕を見学した。地下二〇米程も入ると真夏でも寒く、厚手の足元まである長いコートを羽織るように用意がある。薄明りの下に迷路のような通路が四方八方に通じて、ハイラルの街下に網の目のように広がっているという。それは実に堅牢な日本軍の基地であった。

ロシア軍との国境紛争の為に現地の中国人を強制連行して掘らせた驚くべき要塞であった。そしてこの強制労働に携った人達を秘密を守る為として皆殺しにした事実が、後になって発覚したという。「平和の森」で見学したあの塚は「万人坑」と呼ばれていると添乗員の李先生から聞いた。一万人余りの人達が殺されて、投げ込まれたのか？・・・。誠に惨い。そしてロシア軍に敗れた日本側も多くの死傷者を出したのである。「戦争を知らない」にも等しい私にも同じ日本人として、どうしようもない罪悪感が残った。

「海拉尔」戦跡 松本杏花

墓壘无言野花落
行人添泪少人知
他乡焦土英雄骨
溽暑蝉鸣岁月移



墓壘は無言にして野花落ち
行人の涙添えるを知る人少なし
他郷の焦土に英雄の骨
溽暑に蝉鳴き歳月移る

最後にホロンバイルの「包」に泊まった様子を少しばかり。

はだか馬乗りこなす漢汗の玉
青蛙風に草の香立ちのぼる

今年は十年ぶりに雨量が多い為に大平原の緑が例年より美しいという。うねりゆるやかな草原が天に続くかのように眩い。モンゴル独特の包(パオ)に寝るのも楽しみにしていた。円錐形の中にベットが置かれ五人で一晩過ごした。食事やトイレは別の包まで懐中電灯で照らし乍ら行くのである。

地平線のかなたにもう一つの包の群が見える。広々とした平和な地球を眺め複雑な気分になった。
涼風や遥かなる湖輝きて

(次号に続く)

「季語研究会会報」10月号より転載

龍には九匹の息子がいるのですが、その息子たちの誰も父親のような正真正銘の龍ではないし、それぞれ姿も形も性格も異なっています。

長子は鼉肩(びし)といい、亀趺(きふ)とも呼ばれます。身体は亀の形で、重いものを背負っているのが大好きなのだそうです。それで、いつも大きく重い石碑を背にしています。中国のお寺、廟の庭、古い庭園などを訪れると歴史的由来などを彫刻した重い石碑を背負っている鼉肩の姿をよく見かけます。

二番目の息子は狻猊(へいかん)といい、憲章とも呼ばれます。顔は虎に似ており、強い力があります。人間の行いの是非を糾すのが好きなので、監獄の門の上などに飾られました。

三番目の息子は、螭吻(りふん)といい、好望とも呼ばれます。螭吻は蛇に似て足がなく、遠くを眺めるのを好みます。また火を呑むこともできますのでいつも高い屋根の上で見張りをし、建物を火から守る役割をしています。

四番目の息子は椒圖(しょうず)といい、貝にも蛙にも似ており、口をしっかりと閉じています。玄関の門鉞^注となって泥棒や外敵を追い払い、門番としての役目を忠実に果たしてきました。

五番目の息子は、囚牛(しゅうぎゅう)といい、身体は鱗で覆われていて黄色の小さな龍の姿をしています。囚牛は賑やかなことや、音楽が大好きなので、漢族の二胡だけではなく、彝族やチベット族などの少数民族の楽器にもその姿がよく見られます。頭を高く上げ、口を大きく開き、何か歌っています。

中国山西省の五台山には龍の五番目の子・五爺を祀った「五爺廟」という有名なお寺があります。五爺は人々の願いごとをよく叶えてくれるそうで五爺廟

はいつも賑わっています。人々は願いごとがあると五爺廟にお参りし、願いごとが叶うと又、五爺廟にお参りし、賑やかなことが好きな五爺のために、爆竹を鳴らしたり芝居を奉納したりして感謝の意を表します。

六番目の息子は、蒲牢(ほろう)といいます。龍の子とはいわれるものの、鯨を見ると怖くて大きな声で吼えます。それで人々は、蒲牢を釣鐘の紐を吊るす飾りにし、鯨の形をした木で釣鐘を叩くと、蒲牢は大きな声で吼え、鐘の音は更に遠くまで響いて行きます。

七番目の息子は、饕餮(とうてつ)といいます。狼に似ていますがお酒を飲んだり、肉を食べたりすることが大好きです。青銅器に好く見られる饕餮紋がこの子の顔なのだそうです。

八番目の息子は、狻猊(さんげい)といい、獅子の別名にもなっています。姿も獅子そのものです。狻猊はじっと座って香の煙が立ち上るのを見ているのが大好きなので、仏像の台座や、お寺の香炉の足などになっています。

九番目の息子は、睚眦(がいし)といいます。山犬の顔で凶

暴な目つきをしているそうです。性格も凶暴で戦うことを好むので刀の柄や劍鞘にその顔をよく施します。

[注]

門鉞：門環ともいい、両開き門の左右の扉に取り付けられた金属の台座に輪を付けたもの。来客が来ると、その輪をガチャガチャと扉に打ち付けて家人に来訪を知らせます。



重い石碑を背負う鼉肩



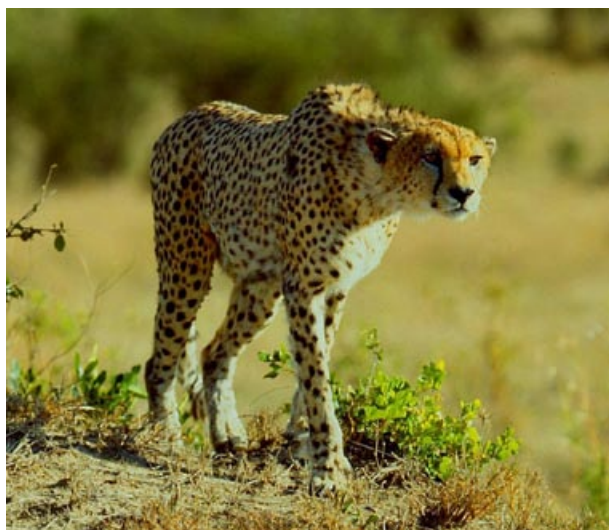
蒲牢：鐘の紐を通す飾り



キリマンジャロの氷河



草原の王者アフリカライオン。夕暮れが近づいたサバンナで、何かしら思いに耽る雄ライオン。「ちよいとライオンのお兄さん。なんで難しい顔してソッポ向いてるの?」「いぼ猪に顔面蹴られて引きつってまんねん!」



最速のランナー、チータ

■ 別世界の経験

ケニヤとタンザニアへ初めて入るため、横浜検疫所まで出かけた時だ。見慣れぬ小さな部屋に通されて痛い思いをして黄熱病とコレラの予防接種を受けると、既に別世界へ入った興奮を覚えていた。

ケニヤ空港のイミグレーションでUS \$の所持金がほんの少し申請額と違うだけでしつこく追求されて税関職員に袖の下を渡した事も、キリマンジャロ山(5895m)のチェックポストで(予め許可を取っているのに)入山者が多いので入れないと言われて法外な入山料を取られた事も、タンザニアの国境で柄の悪いドライバーに相場の3倍のチップを脅し取られた事も、別世界の経験だった。それはこのドライバーが言ったように「This is Africa!」だった。

■ 赤道直下の万年雪

アフリカ東部を4000kmに渡って南北に走る大地溝帯(リフトバレー)。2000万年前に始まり今も活動するこの断層に沿って激しい隆起活動が起き標高1000~2000mの広い高原を形成した。そして周辺には多くの火山が生まれた。

キリマンジャロ山(5895m)もその一つで、アフリカ大陸の最高峰だ。赤道直下に在りながら万年雪を頂くこの山に憧れの想いを抱くのはヘミングウェイならずともだ。そして高原の大草原に生きる野生動物たちにも。

”西側の山頂近く、干涸らびて凍り付いた1頭の豹の死体が横たわっている。こんな高い所まで豹が何を求めてやって来たのか誰も説明した人は居ない”

ヘミングウェイ著「キリマンジャロの雪」より

■ 野生動物達のテリトリー

野生動物達のテリトリーの中にテントを張っているの、夜になると徘徊する動物達の鳴き声が直ぐ傍らに聞こえる。背の高いマサイ族の男が長い槍を持って周りを警備してくれているが、ライオンにドラのような太い声で喉をゴロゴロ鳴らされたり地面にへばり付くような声でゴオーと鳴かれると眠れない。

連夜の睡眠不足の中でセレンゲティ平原をジープで走っていた4日目だった。他の動物は何度も見掛けるのに一番撮りたいチータには会えないでいた。

動物は気長に探すしかないと判っていても、マサイ族のガイドに「ガイド料をもっと払えと言ってるのか?」等と有らぬ疑いの目を向けてしまう。しかしチャンスは突然やって来た。草原にポツンと見える小さなブッシュの傍を通り過ぎようとした時、ガイドが突然ジープの速度を落として静かにブッシュに近づいた。するとチータが、昼寝を邪魔されたかのような不機嫌な顔つきでノソリと現れた!

● 大川さんのホームページはこちら

<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm>

<http://kawamoto1940.web.fc2.com/>

<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/queenvalley.htm>

●すでに掲載された「写真便り」はこちらにあります

<http://wanli.web.infoseek.co.jp/ookawasan/essey-title.html>

前編ではシーギリヤの説明と土産物売りとの出会いについて書きました。後編をお楽しみください。

友人夫妻と目が合うや否や、大小の木彫りの象や、キャンディダンスを踊る男女の踊り子の木彫り等を次から次へと地面に並べ始めると同時に値段をまくし立てます。通常料金とディスカウント料金を交互に言っているらしいのですが、いくら耳を傾けても値段の違いがハッキリとは判りません。

ここら辺のテクニックは日本の夜店のオジサンのだみ声と似たようなもので、ハッキリ判っては都合が悪いのでしょうか。そして、いよいよ彼が最も売りたい象をモチーフにした木板彫刻の登場です。彼にいわせると、立像と違って平彫りなので持ち運ぶ途中で尖っている部分が欠ける事が無い、平板なので手荷物に入れ易い等々と盛んに買うようにアピールしてきます。値段に関しては有耶無耶の内に駆け引きは進んでいきます。僕は値段をハッキリいわないので、怪しいと思っていると案の定です。友人夫妻が彼の作戦に根負けして、その木版を買いたいと言ってしまいました。彼の作戦勝ちです。ここで彼は一気に勝負に出ました。なんと強気に出て、5000ルピーというのです。そのころのレートでは日本円にして4500円位になりましょうか、日本から来た友人夫婦にとっては大した金額では無いと思いますが、現地に住んで生活している僕にとってはベラボウな金額です。5000ルピーといえば、「世界一高価な玩具」(「わんりい」2006年12月号・119号)でも登場の、僕の運転手として会社が雇っていたウダヤ君の基本給よりもチョットだけ少ない金額だからです。更にその木版の出来具合が前編でも書いたとおり非常に稚拙だったので、これが売り物としては考えられなかったからです。

友人夫妻は面倒臭くなっていて、その値段で買うつもりになってしまいました。でも、僕はこの値段では買わせる訳にはいかないと思い、ムキになっていました。この値段で買ってしまおうと、この値段が日本人向けのスタンダードな価格になってしまい、後から来る日本人観光客に迷惑をかけてしまうからです。この様な理由で値段交渉を任せてもらう事にしました。

先ず先制パンチとして、駄目元で500ルピーなら買うと言ってみました。これで彼が諦めてくれればラッキーと思ったのですが、やはり一筋縄ではいかない相手です。

彼は、家に帰れば年老いた母親と妻子がいて、木版が売れなければ今夜の食料を買えないと泣き言をいいます。500ルピーあれば1週間分の食料は楽に買えると思っていたのですが、彼の言い分が面白そうなので値段交渉を続けました。その後も、親方にショバ代を払わないと酷い目に合わされるとか、仕入れ元にも代金を払わないと次の品物を仕入れられないとか、延々と泣き言が続きました。

彼は、日本人はお金持ちなんだから、これ位の金額でガタガタいうなと思った事でしょう。でも、日本人向けスタンダード価格を決める事になってしまうのでは、僕も引く事はできません。結局、2200ルピーで彼も同意して、友人夫妻はお土産品を手に入れました。

駐車場に戻って、待っていたウダヤ君にこの話をするに僕は怒られてしまいました。ウダヤ君は、木版に使っている材料の木は硬いので有名な木だそうで、彫刻の良し悪しとは無関係に材料費が高いのだから、2200ルピーでは安すぎるというのです。更に、1週間に1枚でも売れば良い方なのだから、彼の稼ぎは知れた物で、それを値切ったのでは可哀相だともいうのです。週に1枚でも月にすれば4,5枚は売れるのだから、ウダヤ君よりは稼ぎは多くなるのですが、人の良いウダヤ君は自分自身の基本給はすっかり忘れています。

スリランカでは「喜捨」の教えが残っていて、至る所で食事を提供したり様々な施しを行っている場面に遭遇します。ウダヤ君にいわせれば、土産物売りは貧者なのだから、観光客は富める者として施しを行わなければいけない、という事らしいのですが、今回のケースは違う様な気がしました。相手はこちらの足元を見て近寄って来ているのだから、喜捨を受ける資格は無いと思うのですが、僕の判断は正しかったのでしょうか。

僕も少し値切りすぎたかと反省し彼の処へ戻って、彼の言い値(かなり高額)で小さな象の木彫りを数体購入しました。その時の、彼の嬉しそうな顔は正に喜捨を素直(?)に受け入れる者の笑顔だったと思うし、僕も素直(?)に施しをする者の顔だったと思います。あんまりムキになって値段交渉をするのは考え物だという事ですね。こんな思いをして手に入れた木板彫刻を重いからといって、友人夫妻は僕に売りつけて第3国に旅立ってしまいました。

この木板彫刻を夢広場会場に持って行きますので、興味のある方は見に来て下さい。

アフリカとの出会い (27) ASANTE SANA!(アサンテ サーナ=ありがとう)

竹田 悦子 アフリカン・コネクション代表

2003年から相模原市の橋本でひっそり始めたアフリカ支援活動も5年目を迎えようとしています。

日本でのアフリカ理解への活動で得た資金をもとに、エイズ孤児団体への衣服の寄付、文房具の寄付等を行ってきました。2006年には、農村部に住む女性5名それぞれに8000円ほどを一年間融資するマイクロファイナンス活動を始めました。2008年には、小学校と高等学校に市内の中学校から譲って頂いたボールを寄付しました。今回は、今年9月にケニアに里帰りした夫からの報告を基に、活動がどのように評価されているのかをお伝えしたいと思います。

2006年9月に融資を始めて2年たちました。5人の女性たちはいずれも子供を5～8人抱える家族のお母さんたちです。共通するのは、夫がいないか、いても仕事がないゆえに現金収入がないことです。

融資にあたって、母さんたちはいろいろな事業計画書を作成してきました。「牛を飼い、ミルクを売る」「卵を売る」「バスに乗って作った野菜を隣町へ売りに行く」等々。8000円の投資は、一年後には、融資を受けたすべてのお母さんたちの定期的な収入を得られる事業へとなっていました。一人のお母さんは、お店を持つことさえも成功しました。8000円の元手を回収した後は、そのまま別の人に貸し付けました。

相模原市内中学校から譲り受けたバレーボールとサッカーボールは4ヶ月かかって船便でケニアの小学校と高等学校へ寄付されました。大規模校ながら、もともと学校が所有していたボールはわずか3個。日本から50個のボールが届いたとあり、子供たちだけでなく先生や地域の大人も大喜びでした。夫を迎えた感謝の会のあと、そのボールを使った「ガスパレイ杯」(=夫の名前です)が行われました。

2007年末の暴動から半年以上たちました。ケニアの人々は、その「あまりにも大きい代償」に直面する日々が続いています。経済の落ち込み、国内外の「政治不信」。しかし、いつどんなときも「家族を思う気持ち」は世界共通です。

いろいろな方のお力でこれまで、沢山のケニアのお母さんたち、子供たちが、「今ある状況を少しでも変える」ことが出来ています。それは本当に小さな変化かもしれませんが、着実な変化であることを励みにこれからも活動を続けていきたいと思っています。



「感謝の会」でスピーチをする夫・ガスパレイ



「感謝の会」に集まった子どもたち



こんな青空の下、ガスパレイ杯が開かれた



ガスパレイ杯・サッカー

初めて亜丁を訪れた時から既に三年の月日が流れていた。いつか再び訪れる日を胸に描きつつも、日本でのせわしない日常に追われるうちに月日は過ぎて、記憶の中に沈み込んでしまいそうになっていたこの土地に、思いがけず再びやって来ることができたのだ。

旅の道連れとなったアーロン、シャオチン、ウインの三人と共に、前夜泊まった稲城の温泉から朝まだ暗い3時間の道のりを車を飛ばしてきた私達は、この日亜丁の入り口まで来ていたのだった。

やっぱり違うよね……。出発前の朝食をとっていた小屋の中で、自らポーターをかってでた少年の顔を覗きこみながら私は呟いた。16歳だという彼のまだ幼さの残る可愛らしい顔立ちが、どこことなく思い出の亜丁の少年と似ていなくもないが、大人しそうな彼からは、あの時の少年の、人を引き付けるやんちゃな腕白坊主といった雰囲気は感じられなかった。

私はポケットから古びた手帳を取り出した。乗り物の時刻表や地名、旅の途中で出会った人の名前などが走り書きしてある旅行用のメモ帳だ。中国では筆談が欠かせないため、すぐに取り出せる様にいつもズボンのポケットに入れてあった。

その手帳は長い間、旅行用のザックに入れっぱなしになっていた物で、前回亜丁を訪れた時も使っていた。あちこちの土地で無秩序に書き付けられたメモの中には、あの時少年に教えてもらったチベット語の単語がいくつかと、チベット名を中国語の当て字で書いたと思われる、拙い彼の直筆で書かれた名前も残っていたのだ。

私はそのページを開いてポーター少年に見せながら尋ねた。

「ねえ、あなた彼を知らない？ 歳はあなたと同じくらいの筈なんだけどな」

「四郎旺堆……スラワンドゥイ？ 僕も昔スラワンドゥイって名前だったことがあるよ」

え？ チベット人は途中で名前が変わったりするの？ 訳が解からなかったがそれについては深く追求せずに言った。

「でも、あなたじゃないなあ……」

するとポーター少年が言った。

「他にもスラワンドゥイって奴がいるから、彼を見つけたら僕が聞いてあげるよ」

どうやらよくある名前ようだ。

小屋を出ると朝日がいっぱい降り注いでいた。湿った土の匂いが香り、木々の緑が朝の光をあびて輝くピカピカ

の朝だ。やった～!! 亜丁だ!! とうとうここまでやって来たんだ～!! 澄んだ空気を胸いっぱい吸い込んだ。

さあ、行こう!! 稲城から一緒にやってきたアーロン、シャオチン、ウインと共に声を上げると元気に歩き出した。ポーター少年は私の大きなザックを背負うと胸を張り、私が持っていた水筒を手にとると「これも僕が持つよ」とやる気満々だ。自分の力でお金を稼ぐ事を誇らしく感じているのか、少年は嬉しそうだった。

小屋の前の道を下るとそこは馬よせになっていて、沢山の馬が柵の中に入れていた。三年前私もここで馬に跨り意気揚々と出発したのだが、貧乏バックパッカーの今回は徒歩である。道には馬を引く馬子達が行列をつくって座っていた。これからやって来る観光客を乗せる順番待ちをしているところなのだろう。こんなに観光客が来るのかぁ……。以前と比べるとなんだかずいぶん活気付いている様子だ。

私のポーター少年が、こちらに背を向けて座っている一人の少年に近づくと、背後から肩を揺すって振り向かせた。

「彼の名前はスラワンドゥイだよ。どう？」

「うん、違う」私は首を振る。

いきなり振り向きざまに、この子じゃないと首を振られた少年は「なんだよ～!!」と迷惑そうな声をあげた。

仕方ないよね……。あの時から既に三年の月日が経過しているのだ。この土地にすっかり腰を落ち着けている年配者ならいざしらず、彼は成長期の少年だ。

少年の家がある亜丁村には小学校しか無いそうで、三年前のあの時ですら稲城の街の中学校に寄宿して通っていると聞いていた。私達が出会った時はたまたま夏休みで村に帰っていただけなのだろう。あれから三年経って既に高校生の年齢に達しているはずの彼がこの村にとどまっている筈はなかったのだ。今頃はもっと遠い街の学校に通ってるんだろうな……

私にとって亜丁の思い出は、素晴らしい自然の風景もさることながら、なんといっても少年と、二人で訪れた宝石の湖で、その二つは切り離せないよう感じられていた。イメージの中では亜丁にいけば少年にも会えるように思われていたのが、現実的に考えればもう会うことは出来ないのだろうと思うとなんだかとても残念な気持ちだ。私がそんな感傷に浸っていたその時である。突然がっしりとした背の高い男が近寄ってくると、「そのポーターをいくらで雇ってるんだ!？」と声をかけてきた。新たなポーターの売り込みに来たのかと思い「もう間に合ってるから」と手を

振って立ち去ろうとしたが、男は険しい顔つきで執拗に追いかけてくると「幾らだ？ 幾らだ？」と尋ねてくる。

最初は無視していたが、男のしつこさに辟易したアーロンが、もう他のポーターを雇いなおす余地はないんだという意味を含めて「2日間で220元だよ！」と答えた。その金額は先ほどの小屋で少年がポーターに名乗り出た際、幾らで彼を雇えば良いのか判らなかつた私達と少年が、その場に居た村人達に妥当な金額を尋ねた時の彼らの言い値だ。この亜丁自然保護区を二日ばかりで周遊できるトレッキングコースがあるらしく、その間ポーターを雇うならそれくらいの金額だという話が出たのだ。

そんなコースがあるのならばぜひ行って見たいものだが、手持ちの現金が心もとない私にはそのような金額でポーターを雇う余裕など無かつたし、亜丁でどう過ごすかという計画など立てていない。実際には一番近いポイントの沖古寺まで30円で雇っていただけだった。

ところが「彼を二日間雇っているから、もう他のポーターは要らないんだ」と聞いた男は引き下がるところかますます勢いを増し、「そんな金額じゃ駄目だ!!」と私達の行く手をふさぐようにして怒りだしたのだ。「あんたに何の関係があるんだよ!!」いい加減苛立ってきたアーロンが語気を強めて男に尋ねると、男は私のポーターを指差して言った。

「関係あるさ！ こいつは俺の弟だ。弟をそんな安く使うなんてこの俺が許さないぜ」

それまで誰も注意を向けていなかったポーター少年に、みんなの目が一齐に向けられた。先ほどまで胸を張りニコニコしていた少年が、顔を赤くして可哀相になる程うな垂れていた。「彼は君のお兄さんなのか？」アーロンが尋ねると少年は小さく頷いた。

事情が飲み込めた私達は、実際に雇っている金額を男に告げると、男はしぶしぶ納得した様子で「30円で沖古寺までだな！ それ以上だったら許さねえぞ」と念を押し、やっと立ち去っていった。なんだかみんなグッタリした気分だった。

まったく亜丁の入り口に立ったばかりだというのにこれである。気分ぶち壊した。

「何なんだよ！ あいつは」アーロンが声をあげた。

「別に俺たちが無理にポーターをやらせた訳じゃないぜ。彼が自分でやりたいって言ったんだ。金額だって俺たちが決めたんじゃない。せっかく綺麗な自然の中に来て、こんな金の話で揉めるなんて気分が悪いぜ」

みんなも同感だった。アーロンの言葉を聞き、ポーター

少年が先ほどの元気とはうって変わって下を向きしょんぼりしているのが可哀相だった。別に彼に非がある訳ではないのだ。

しかし内心一番悲しかったのは私だ。他の三人とはこの土地に対する思い入れが違うのだ。心の中で大切に暖めていた感激の亜丁再訪の旅立ちに、なんでこんな目に合わなきゃならないの!? 爽やかな出発の気分を返してよ〜!! ポーター少年の兄だというあの男が恨めしい。時計を巻き戻して振り出しに戻りたい気分だった。

気分は相当悪かつたが、亜丁の風景は懐かしかった。白濁した川にかかった木の橋、林の中を登る急な坂、チベットの経文が彫り付けられた石をピラミッドのように積み重ねて立てられているマニ塚。次々に記憶の中に残っている風景が現れてくる。

見たところ徒歩で歩いているのは私達だけだった。後からやってくる観光客が続々と馬に跨って私達を追い越していき、前方からも折り返してきた観光客が馬に乗って戻ってくる。馬上で両手を振りながら満面の笑みを浮かべてやってくる人がいると思ったら、理糖から稻城に向かうバスの中で出会った真っ赤なジャージのおじさんだった。この朝まだ開いていない料金所のゲートをこっそり潜り抜けた後にも再会した、あのおじさんだ。私達と同時に亜丁に到着した筈なのにもう戻ってきたのかあ。

私達が亜丁の入り口的小屋でゆっくり朝食を食べたり村の人たちと喋ったりしている間に、馬に乗って洛絨牛場まで往復してきたのだろうか。せつかくここまでやって来たのに、数時間で帰ってしまうなんてもったいないなあ・・・でも普通の観光客はそんなもんなのだろう。楽な移動手段で切り取られたように美しい風景だけを眺めて写真を撮り、その場所に行ったという証拠を集めて旅のコレクションにするのだ。

みんなは亜丁の山の上にあんなに美しい宝石の様な湖があることを知っているのだろうか？ それが見たくて、この土地が忘れられずに再びやってくる外国人までいるというのに。私のそんな気分も知らずに、おじさんは馬上から両手で私の手をぎゅっと握って握手すると、顔中笑顔にして手を振って去っていった。憎めないおじさんだ。亜丁の懐かしい風景とおじさんの笑顔で、先程の気分の悪さは徐々にほぐれてきていた。なんといつても私は亜丁に戻ってこれたのだ。ばんざーい!!

(次号に続く)

中国山西省のワンダーランド・綿山^{めんざん} (mián shān)

♥ ♣ ◆ ♠ 仏教と道教のテーマパーク ♥ ♣ ◆ ♠

岩田温子

山西省の省都・太原から車で南に下ることおよそ2時間、綿山は石灰岩からなる険しい渓谷に沿った観光地です。

介子推^{かいしすい} (jièzǐtuī) 注1) という、2700年ほど前、晋(今の山西省にあった国)の君主に仕えていた人物の悲劇的な終焉の地として昔からよく知られていました。主君に忠を、親に孝をつくした介子推は、後に儒教の「徳」の鑑とみなされ、歴代の王朝の皇帝がたびたび参拝にやってきました。

またこの谷の険しさによって、修行の場として僧侶や道士たちが住みつき、寺を建て、古くから信仰の山としても知られていました。しかし、時代の推移とともに寺は廃墟となり、綿山は人々から忘れられた存在になりました。

1995年から、この綿山を新しい観光地として蘇らせる事業が地元出身の炭鉱会社社長によって始められました。仏教の信仰、道教の道德教育、そして自然環境に親しむ要素を取り入れたテーマパークとなり、毎年60万人もの人々が訪れています。

綿山は大きく4つの部分に分かれています。渓谷の入口近く、「大羅宮」という道教の寺と、復元された唐代の軍事基地を中心とした「龍脊嶺景区」、その奥の「雲峰寺」と即身仏のある「正果寺」を中心とした「高山遊覧区」、介子推

の墓を中心とした「介公嶺景区」、そして一番奥の、溪流に沿ったハイキングコースがある「水湫溝景区」です。

「大羅宮」から「雲峰寺」の間の、お寺を結ぶ歩道は適度な上り下りのあるハイキングコースで、深い渓谷や向かい側の山の景色も楽しめます。そして、「大羅宮」と「雲峰寺」は岩壁に寄りかかるように、楼閣を上へ上へと何層も積み重ねて建てられ、その建築様式には圧倒されます。「介公嶺景区」には山の上の介子推のお墓の他に、介子推の死を悼んで始まった「寒食節」注2) という行事に関連の資料館があり、道德教育の場となっています。渓谷の一番奥の「水湫溝景区」では、片道4キロの花崗岩の溪流沿いの緩やかな起伏に富んだ道を歩いて、森林浴が楽しめます。

注1) 介子推：後に春秋五覇の一人に数えられる晋の重耳が、内乱によって諸国を放浪している時より仕え、陰ながら重耳を支えた。重耳が晋公の位についた後、母を連れて綿山山中に隠栖し、死ぬまで世に現れなかった。

注2) 寒食節：晋公が介子推を呼び戻すために綿山に火を放ったが、介子推は現れず母親とともに焼死したのを悼んで始まったといわれる。

※何媛媛来信(‘わんりい’HP)「寒食節と綿山」もご参照ください。

♥ ♣ ◆ ♠ 綿山を楽しむ ♥ ♣ ◆ ♠

小林慶子

■ 到了綿山

私達のバスが綿山を登り始めた時、外は大粒の雨、空は遠くまで煙っていて眺望は全くなし。翌日の天気予報も雨。予定通りのハイキングはできないでしょうと全員が思った。ひとまず各自部屋で荷物を解き、夕食前に集まって予定をどうするか皆で案を出し合い相談した。

翌日早く目がさめカーテンを開けてみる。いい天気。深い谷を目前に、切り立った石灰岩の岩に張り付くように建っているホテル「雲峰野苑」からの眺望も絶佳。胸が躍る。

■ 栖賢谷ハイキング

バスでホテルから5分位の所、封候亭というところから登り始めた。ガイドの郝さんが、簡単に「どうぞ」と言う声で歩き始めた。が、登り始めるといきなり、轟音の滝の脇に斜めに掛けられた粗末な梯子。鎖の手すりに掴まりながら恐る恐る進んでいく。足の下は滝から流れ落ち



ホテル・雲峰野苑は、由緒ある寺「雲峰寺」に隣接している (撮影：筆者)



急斜面の狭い谷に延々と続く梯子 (撮影：岩田修二)

る水が大きな岩にぶつかり狭い谷に反響して凄い音がしている。

両手でしっかりと鎖を持って一歩ずつ足元を確かめながら落ちる恐怖と戦って登ってゆく。滝を登るとまた滝。肩すれすれに滝が流れ落ちる。梯子は滑りやすく緊張が小一時間ほど続く。よくもまあ、こんな急斜面の狭い谷に杭を打ち、梯子を取り付けたものだと感じた。スリ

ル満点のこのコースはもう一度挑戦したい。

■水濤溝ハイキング

午後からは水濤溝へハイキング。ここは遊歩道が整備された、大勢の家族連れで賑わう観光地だ。溪谷に沿って奥に進むと滝が現れたり、岩や木々が水に映り美しい景色を見せてくれた。突然、流れの中に恐竜の派手なオブジェが2体(テラノザウルス、イグアノドン?)、更に、龍やワニといった様々なオブジェが次から次へと現れる。自然のままに十分美しい溪谷になんという心無いオブジェ。これには何とも興ざめた。

一番奥の水簾洞では、滝がカーテン状に流れ落ち、その裏側に入れるよ

うになっていた。メンバーの一人は勇敢にも滝の脇の滑りそうな道をつたわって滝の裏側に入り、私たちに手を振ってくれた。中には三体の石の仏像があったそうだ。

■雲峰寺

ホテルの6階テラスに続く雲峰寺は、石灰岩の大きな洞窟に明代建立されたお寺とのこと。洞窟上部の岩肌には大きな鈴が無数にぶら下がっている。サオなどの道具を使ってとても取り付けられる位置ではない。お参りする人達の中には願いごとがあると、このお寺で大きな鈴を買い求め奉納したりするのだそうだ。その奉納の仕方がとてもユニークだ。お寺のお坊さんがこの鈴



美しい流れの中に突如として、恐竜や龍、そしてワニなど様々な原色の動物が現れてビックリ! 子連れの家族や若者のカップルも多いところだけれど、何もなくても美しい溪谷だけにもったいない。(撮影: 沖田辰夫)

を抱えて、洞窟上方の切り立った岩に登り、自分の体にロープを巻きつけ、岩の上から宙吊りになって下りてくる。そして、ロープでしっかり縛った体を2度、3度大きく揺らしたかと思うとその反動を利用して岩壁に打ち付けてある杭に鈴をひっかけるのだ。

大勢の観光客と一緒にこの一部始終を息を吞んで眺めた。まるでスパイダーマンのような身軽さである。終了すると懐からバクチクをとりだし「バン、バン、バン」とならしロープをのばしてスルスルと地上に降りた。地上に足がついたとき、誰もがホッとして拍手が起こった。料金は鈴と取り付け料を全部ひっくるめて1640元とか。



垂直に切り立った崖の中腹に大鈴を取り付ける (撮影: 筆者)



テレビニュースからの情報を基本的に物事を判断し、疑問も持たずに生活をしていくうちに、日本の価値観にどっぷり浸かっている。実はその考え方は狭い範囲でしか通用せず、別の世界からは憎しみをもって受け入れられていたとしたら…。

筆者は20年以上も前から、アフガニスタンで診療活動を行っている。20年の月日のなかで、チームは医療の範囲を超え、井戸を掘り、土を耕し、生きるための最低限の環境づくりに奔走することになる。「病気どころではない。まず生きておれ!」という状況下で、医療活動以上に求められることが多々あったのだ。医者である著者は、いつしかそれ以上の存在として現地に関わっていく。そのような「辺境で診る」著者が「辺境から見る」と日本はまだ別の形で表れる。

戦争の惨禍を知る JAPAN は、ヒロシマ・ナガサキの

名とともにイスラム社会にも好意的に受け入れられていたらしい(哀しいことに、私はその事実を知ることからスタートした)。著者は「平和こそが日本の国是だ」と現地の人々へ伝え、車両には日章旗が描かれた。日の丸を掲げることが、親日感情を利用したテロからの防衛策だったのだ。

経済支援という形で湾岸戦争に参戦したことから、日本は「米英の卑屈な走狗」と印象を変えていく。2001年9.11の後、アフガニスタンが注目されるようになり、著者も国会で発言を求められる。「アフガン難民を守るため」の自衛隊派遣について、「軍事協力は反って有害無益で、徒に敵を作り、国家国民の防衛にならぬ」という著者の主張は嘲笑と野次をもって迎えられた。著者は言う。「平和の国是が既に空文化した」と。

自衛隊は現地で「日本軍」として認識され、そのなかで子どもたちは空爆と飢えに苦しんだ。私たちの自覚がないまま、日本に対してリアルに恨みと憎しみを持った子どもたちが大人になっていく。著者の視点を借りて日本を見たときに、空虚な恐ろしさに襲われた。

真中智子

cháng huí jiā kàn kàn 常回家看看

zhǎo diǎn kōngxián zhǎo diǎn shíjiān
找点空闲, 找点时间
lǐng zhe háizi cháng huíjiā kàn kàn
领着孩子, 常回家看看
dài shàng xiàoróng dài shàng zhùyuàn
带上笑容, 带上祝愿
péitóng àiren cháng huíjiā kàn kàn
陪同爱人, 常回家看看
māma zhǔnbèi le yīxiē láodao
妈妈准备了一些唠叨
bàba zhāngluó le yī zhuō hǎo fàn
爸爸张罗了一桌好饭
shēnghuó de fánǎo gēn māma shuō shuō
生活的烦恼跟妈妈说说
gōngzuò de shìqíng xiàng bàba tán tán
工作的事情向爸爸谈谈

cháng huíjiā kàn kàn cháng huíjiā kàn kàn
常回家看看, 回家看看
nǎpà bāng māma shuāshuākuàizi xǐ xǐ wǎn
哪怕帮妈妈刷刷筷子洗洗碗
lǎorén bùtú érǎn wèi jiā zuò duōdà gòngxiàn ya
老人不图儿女为家做多大贡献呀
yībèizi bù róngyì jiù tú gè tuántuányuányuán
一辈子不容易就图个团团圆圆
cháng huíjiā kàn kàn cháng huíjiā kàn kàn
常回家看看, 回家看看
nǎpà gěi bàba chuí chuí hòubèi róu róu jiān
哪怕给爸爸捶捶后背揉揉肩
lǎorén bùtú érǎn wèi jiā zuò duōdà gòngxiàn ya
老人不图儿女为家做多大贡献呀
yībèizi zǒng cǎoxīn jiù bèn gè píngpíngānān
一辈子总操心就奔个平平安安

‘わんりい’のおたより会員へのお誘い
年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：0180-5-134011‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。

入会はいつでも歓迎しています。

活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100 (事務局)

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報‘わんりい’は、会員の皆さんから寄せられた原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。皆さんの投稿をお待ちしています。

*紙面が16pと限られていますので、掲載まで暫くお待ち頂くことがあります。また、紙面の都合で作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

中国伝統演劇・京劇鑑賞が何倍も楽しくなる (詳細: チラシ)

京劇わくわく講座

● 参加会費: 1,500円
(全席自由席 188名)

2008年12月12日(金) 18:30 ~ 20:30 (開場: 18:00)

於: 町田市民フォーラム・3Fホール

小田急線町田駅南口徒歩7分・JR横浜線町田駅ターミナル口徒歩3分
<http://www.city.machida.tokyo.jp/shisetsu/com/com14/>

zhāng shào chéng

yīn qiū ruì

◆ 講師: 張紹成 (武生役) & 殷秋瑞 (花臉役)

※武生: 立ち回りを役どころとする二枚目

※花臉: 顔に限取をする豪傑役

● 久美堂本店・2Fで直接、会員券を購入
入できます ☎: 042-725-1330

● お問合せと申込み: ☎: 042-734-5100 わんりい



凛々しく見得を切る張紹成さん



【京劇の演目のこと】

京劇は、日本でいえば歌舞伎のような存在の、中国の代表的な演劇です。けれども京劇=孫悟空のお芝居と捉える人も多いようです。というのは、実は私もかつてはそうだったからです。

中国の京劇団が日本で公演するとすれば、まず言葉の問題があります。中国でさえ若い人たちには通じない文語体の台詞を日本人の中でどれだけの人が理解できるでしょう。

京劇のさまざまな約束事を知らない観客大多数の日本で楽しんでもらうには、アクロバットの演技も多く、神将たちや妖怪たち、様々な扮装とメーキャップをしたキャラクターが次々と登場し、ストーリーは誰でも知っている「孫悟空」は無条件で楽しめます。孫悟空の仕草は愛嬌があり、悪さをしていても憎めません。身についた神通力で神将といえど妖怪といえど向う敵なしとばかり打ち負かす痛快さに日常生活の鬱憤も吹き飛ばされるようです。

しかし、京劇は、四千年とも五千年ともいう長い歴史ある中国の、正当派伝統劇です。当然ながら京劇の演目は三国志や楊家将演義のような歴史物語、英雄たちの勇壮な物語・水滸伝或いは白蛇伝のような民話や伝説に取材の演目は限りなく、ざっと数えても100演目をゆうに超えるそうです。

私たちが歌舞伎の演目を繰り返し見て楽しむように、中国の人たちもそれらの演目を繰り返し楽しみ、既に分かっている展開に自分も登場人物になりきって楽しむのでしょう。

玄宗皇帝を待ちながら酔いを深めてゆく楊貴妃のあでやかな酔態を描く「貴妃醉酒」。愛する夫をなんとか生き返らせようと身の危険を顧みず薬草を探しに行く白蛇の純愛「白蛇伝」。楚と漢が覇権を争う中、漢に追い詰められた楚の項羽と虞姫が四方八方から聞こえてくる楚の歌を聞く故事「四面楚歌」の場面で、霸王・項羽が「・・・虞や虞

や 汝を如何せん」と歌い、虞姫が舞う、二人の悲痛な別れ「霸王別姫」。何回見ても涙を誘います。

重い鎧で身を固めた武生の演目では三国志の「長坂坡」。劉備に家族を託された趙雲が単独敵陣に飛び込み劉備の長子・阿斗を胸に、鮮やかな槍使いで立ち回る胸のすくような雄姿と阿斗を趙雲に託した糜夫人が自ら飛び込んだ井戸を埋める趙雲の悲痛な姿。同じく三国志の、猛将・張飛と勇将・馬超の、昼夜を分けず続いたという一騎打ちの立ち回りの素晴らしさ「戦馬超」。或いは、味方の不利な戦況に思わず自分の役目を忘れて加勢に飛び出し、力尽きて命を落とす「挑滑車」の高麗の悲壮な演技。

印象深いのは、「鐘馗嫁妹」。姿よく頭も切れる鐘馗は科挙を受けに行く途中、醜い顔に変えられ試験にも落ち失意のあまり自殺。しかし、玉帝により魔物駆除の役目を受けた鐘馗は子鬼を引き連れ自分の家に立ち戻ると自分を手厚く葬ってくれた友人に妹を嫁がせる。唱あり、台詞あり、舞いありの舞台が進行してゆく内に、姿は妖怪に変じながらも妹を思う鐘馗の気持ちに共感するのです。などなど…。

私がこれまで見た演目はそれほど多いわけではありませんし、比較的分かりやすい演目ばかりですが、京劇鑑賞の暗黙の約束事を踏まえ、繰り返し見ているうちに、舞台上で演じられているドラマの内容は、生まれ育った国は違っても、人間としての喜怒哀楽に違いはないことを知り更に深く引き込まれます。

12月12日の京劇の講座(上記掲示板)は、まちだ市民大学・国際学「中国の伝統芸能・京劇を知る」に関連して開催されます。日本で活躍の京劇俳優・張紹成さんと殷秋瑞さんのお二人が京劇鑑賞の楽しさ面白さへの手引きをさせていただきます。是非、ご参加下さって、京劇に親しみ、伝統文化の面から中国を知る機会にして貰えればと願っています。

'わんりい' 田井

まるごと知ろう！パレスチナ 『ルート181』上映と岡真理さん講演

今年、イスラエルが建国されて、パレスチナに住む人々が難民となったナクバ(大惨事)から60年になります。

パレスチナ人とイスラエル人、2人の監督が共同して撮ったドキュメンタリー映画『ルート181』2人の監督が国連によって分割された境界線(ルート181)を辿りながら、その土地その土地に住むイスラエル人やパレスチナ人に会い、暮らしや声、風土さえも丹念に写し取り、そこからパレスチナをめぐる過去と現在の問題を浮き彫りにしています。

4時間半という長いドキュメンタリーではありますが、映画館では観られないこの映画、お茶など飲んで休憩を取りながらじっくり観て欲しいと思っています。映画終了後、現代アラブ文学が専門で、パレスチナ状況に詳しい岡真理さんの講演もあり、『ルート181』をより立体的に理解できます。

2008年11月29日(土) 13:30～20:30
(13:10開場 上映時間:4時間30分)

於:町田市民フォーラム 3Fホール

参加会費:一般・1200円(1000円)
学生・1000円(800円) ※カッコ内は前売

*親子室あります。事前にお申込みください。

■前売、問い合わせ:

☎:080-3029-6982、042-726-5326
email: tokiko-k@muf.biglobe.ne.jp

- ▶主催 STEPbySTEP 平和
- ▶共催 (財)町田市文化・国際交流財団
町田国際交流センター(国際協力部会)
- ▶協力 まちだ大福帳 岡真理研究室
山形国際ドキュメンタリー映画祭

——チケット取り扱い店:久美堂本店2階——

何媛媛さんと一緒に作ろう!

中国山西省の家庭料理

中国山西省の黒酢・老陳酢にはいろいろなアミノ酸がいっぱい詰まっています。この酢をたっぷり使ったお料理を何さんと一緒に作って頂きましょう。

11月9日(日)9:30～14:00

於:三輪センター ☎044-987-1951

<http://www.city.machida.tokyo.jp/shisetsu/com/com13/index.html>

小田急線鶴川駅 バス 4番乗場から08系統 緑山住宅循環「ゆりの木通り」下車徒歩5分。または4番乗場から01系統鶴川女子短期大学行き「上三輪クラブ前」下車徒歩8分

参加費:実費(1500円から2000円)(要予約)

対 象: 'わんりい' 会員と関係者/先着:20名

メニュー:

- 1 糖醋咕嚕肉(黒酢を使った酢豚)
- 2 酸辣葱頭(玉ねぎの炒め物)
- 3 炒土豆絲(細切りジャガイモの炒め物)
- 4 醋蒜茄子(蒸茄子)
- 5 芹菜拌黄豆(セロリと大豆のサラダ)
- 6 醋蒜(酢漬けニンニクの漬物)
- 7 カラスムギのお蕎麦

申込み&問合せ:042-734-5100 'わんりい'

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついでに折に'わんりい'の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

春節の中国に行く旅のお誘い

お正月(春節)の楽しい雰囲気の中、中国の古代史と自然に触れる旅をご一緒にいかが? 旅行社のツアーにはない中国史跡を巡ります。どなたでもご参加できます。 **募集 10名迄**

北京—殷墟(河南省)〈世界遺産〉—運城(山西省)—韓城(陝西省)—壺口(山西省)—平遙(山西省)〈世界遺産〉—太原—北京

● 期間と費用:2009年2月3日(火)～2月11日(水) 9日間おおよそ23万円(参加人数によって変動あり)

- 殷墟:中国最初の王朝「殷」の3000年以上前の都の跡。甲骨文字が多数出土しています。
- 運城:三国志の主役の一人、関羽の故郷。塩分濃度が死海なみの大きな塩湖があり、温泉施設で死海体験をする。
- 韓城:「史記」の作者・司馬遷の故郷、古い町並みが残っています。
- 壺口:黄河の水がなだれ落ちる黄河の唯一の滝・壺口瀑布を訪れる。
- 平遙:ほとんど完全な形で残っている明代の城壁都市 正月15日(元宵節)のお祭を楽しみます。

* 殷墟から運城への途中、晋城の皇城相府1泊。清代の康熙皇帝の学問の師で、康熙字典の編纂に功績のある人物の大豪邸がある。

● 問い合わせとお申込み:☎& Fax 042-736-6642(夕方以降)(岩田温子) e-mail: Atsukoiwata@aol.com

【11月の定例会&おたより発送予定日】

- 定例会:11月20日(木) 13:30～
- おたより12月号の発送:11月28日(金) 13:30 両方とも田井宅
- ◆ 各催しの詳細及び会場地図などは、'わんりい'ホームページでご覧ください。